

## 我々の『ロランの歌』 *La Chanson de Roland* ?

ーレオン・ゴートイエの『ロランの歌』校訂についてー

蘆尾 柚貴

はじめに

中世ヨーロッパの最も重要な文学作品のひとつとして、間違いなく『ロランの歌』*La Chanson de Roland* の名が挙げられるであろう。778 年のシャルルマーニュのスペイン遠征を題材に、皇帝の甥ロランの武功と悲劇的な死、そしてその報復が描かれている。ルネサンス期以降その存在がほとんど忘れ去られ、顧みられることのなかったこの叙事詩は、19 世紀初頭のフランスで、多くの中世研究者や知識人、文学者たち<sup>1</sup>によって、あらためて学術的な関心を集めるようになった。

この作品について、地域や方言の異なる 7 種類 of 古フランス語写本が伝わっているが、その文献学的詳細に関しては脚注 2 のリストを参照されたい<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> 19 世紀以降の『ロランの歌』受容に関与した人物たちについては、  
Cf. T. Andrew, « Was There a Song of Roland? », *Speculum*, vol. 76, no. 1, 2001, pp. 28-65. ; I-N. DiVanna, « Politicizing national literature: the scholarly debate around *La Chanson de Roland* in the nineteenth century », *Historical Research*, vol. 84, no. 223, 2011, pp. 109-134. ; J. Le Goff, *Héros et merveilles du Moyen Âge*, Paris, Édition Points, coll. « Histoire », 2014, pp. 232-233.

初期の受容の例として、ルイ＝アンリ・モナンによるパリ写本校訂版 (L-H. Monin, *Dissertation sur le Roman de Roncevaux*, Paris, Imprimerie royale, 1832.)、フランシスク・ミシエルによるオックスフォード写本校訂版 (F. Michel, *La Chanson de Roland ou de Roncevaux du XI<sup>e</sup> siècle, publiée pour la première fois d'après le manuscrit de la Bibliothèque Bodléienne à Oxford*, Paris, Silvestre Librairie, 1837)、フランソワ・ジェナンによる現代フランス語訳 (F. Génin, *La Chanson de Roland. Poème de Theroulde. Texte critique accompagné d'une traduction, d'une introduction et de notes*, Paris, Imprimerie Nationale, 1850.) が挙げられる。

<sup>2</sup> 7 種の古フランス語写本については以下のとおりである：

(1) オックスフォード・ボードレイアン・ライブラリー所蔵写本 Digby 23 (O)。年代については諸説があるがおよそ 12 世紀ごろ、アングロ＝ノルマン方言で筆写された。

(2) ヴェネツィア・サンマルコ図書館所蔵写本 ms. 225 (V4)。14 世紀ごろフランコ＝ヴェネツィア方言で筆写された。O 写本の 1～3682 詩行に対応するテキストを含むが、韻律の改変が見られる。

(3) シャトルー市立図書館所蔵写本 ms. 1 (C)。1300 年ごろフランコ＝ヴェネツィア方言で筆写された。V4 写本と同様に、O 写本の 3682 詩行目まで対応しているが、韻律の改変が同様にみられる。

(4) ヴェネツィア・サンマルコ図書館所蔵写本 ms. 251 (V7)。13 世紀末にフランコ＝ヴェネツィア方言で筆写された。V4 写本・C 写本と同じく、O 写本の 3682 詩行まで対応しており、韻律も同様に改変されている。

この論稿では、フランス国立古文書学校の教授であり、その後フランス国立公文書館歴史部の所長となったレオン・ゴーティエ（1832-1897）の、記念碑的な『ロランの歌』校訂<sup>3</sup>に焦点を当てたい。ゴーティエは、1872 年から 1897 年の間に、63 版にも及ぶ校訂版を出版した。これら各版を詳しく見ていくことはできないが、本稿ではとりわけ、1872 年に発表された最初の校訂、1880 年までに登場した初期校訂版、そしてそれらに見られるナショナリズム的解釈に焦点を当てたい。分析を行う上で、初版が発表された 1872 年という年代の重要性は、強調してもしすぎることはない。フランスがプロイセンに大敗した後、国家の名誉が損なわれ、愛国心が高まっていた時代に、ロランという偉大な祖先が成し遂げた偉業を語る『ロランの歌』を校訂し称揚することは、国家と文化の統一を主張する手段となったからである。その意味で、次々に版を重ねるゴーティエの『ロランの歌』校訂は「国民神話 mythe national」と呼ばれる歴史著述の大義名分に寄与するのである。

## 1. ゴーティエの『ロランの歌』校訂：書誌的概要について

レオン・ゴーティエは 19 世紀中葉から末にかけて活躍した、中世文学学者である。1832 年ル・アーブルに生を受け、1852 年にフランス国立古文書学校に入学する。1855 年の古文書管理官への任命以降、順調にキャリアを積み上げ、1871 年には母校フランス国立古文書学校の書誌文献学教授の座に就く。さらには 1893 年、フランス国立公文書館歴史部門所長に就任するなど、要職を歴任するが、1897 年に世を去つ

---

（5）パリ国立図書館所蔵写本 ms. fr. 860 (P)。1275 年以降、フランシアン方言（ただしロレーヌ方言を思わせる語形が散発的にあらわれる）で筆写された。冒頭部を欠いており、O 写本の 1052 から 3680 詩行に対応するほか、韻律も変更されている。

（6）リヨン市立図書館所蔵写本 ms. 743 (L)。14 世紀に、おそらくブルゴーニュ方言で筆写された。本写本固有の前書きが見られ、本文は O 写本の 1153 から 2569 詩行に対応し、韻律も変更されている。また、ロランの死後シャルルマーニュによる反撃を物語る「バリガン・エピソード」は削除されている。

（7）ケンブリッジ・トリニティ・カレッジ所蔵写本 ms. R 3-32 (T)。15 世紀末にフランス西部で筆写された。冒頭部を欠き、O 写本の 766 から 3658 詩行に対応するほか、韻律の改変も見られる。

以上古フランス語写本については、Cf. « Les Textes de *La Chanson de Roland* » dans *La Chanson de Roland*, C. Segres (éd.), trad. de l'italien par M. Tyssens, Genève, Droz, 1989, vol. 1, pp. 47-68. また写本名の日本語訳については、鈴木信太郎他訳『中世文学集－世界文学大系 65』、筑摩書房、1962 年に収録されている、佐藤輝夫訳『ローランの歌』（pp. 3-93.）の「テキスト解題」（p. 4.）を参照。

<sup>3</sup> ゴーティエの『ロランの歌』校訂を論じた先行研究については、

Cf. C. Lucken, « Actualité de *La Chanson de Roland* : une “épopée populaire” au programme d'agrégation », *Le Savant dans les Lettres* (dir. par V. Cangémi, A. Corbellar et U. Bähler), Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2014, pp. 93-106. ; C. Mosser, « La Création d'un idéal national français à travers la redécouverte de *La Chanson de Roland* par Léon Gautier », *Paroles Gelées*, vol. 29, 2015, pp. 35-44.

た<sup>4</sup>。ゴーティエは学術的・個人的なものも含め、155 件にも及ぶ著作<sup>5</sup>を発表するなど大変多作であり、生前総計 63 版<sup>6</sup>をも数える『ロランの歌』校訂版を発表している。以下ではとりわけ第 1 版とその後の改訂、そして第 5 版の書誌的概要を紹介する。

1872 年、ゴーティエ最初の校訂版<sup>7</sup>（アルフレッド・マーム・エ・フィス社第 1 版）が発表された。この校訂版は 2 巻からなる。第 1 巻は、「ある国民詩の歴史 *Histoire d'un poème national*」と題された 200 頁弱に及ぶ序文、オックスフォード写本を底本とした校訂テキスト、そして現代フランス語訳（数詩節ごとに提示）から構成され、11 点の挿絵も確認できる。第 2 巻は、3 ページの簡潔な「序言 *Préface*」、校訂テキストに関する「注と異文 *Notes et variantes*」、古フランス語の「用語集 *Glossaire*」、「索引 *Table générale par ordre alphabétique des matières*」から構成される。このように非常に浩瀚な第一版であるが、驚くべきことに、同年さらに 2 度の増版が行われる。パリはこれら第 2 版、第 3 版について書評を発表している。第 2 版は校訂テキストに修正を加えたもので、ヴェネツィア写本を参照の上、オックスフォード写本に欠落している詩行を補っている<sup>8</sup>。そして第 3 版は完成度に満足できなかった著者がさらなる補足を加えたものであるが、市場には流通しなかった<sup>9</sup>。

これに引き続き、異なる系統の校訂版が複数出版されるが、その中でもとりわけ以下の系統に焦点を当てたい。それは第 1 版を受け継ぐ形で、作者の死まで総計 23 もの版を重ねた校訂版<sup>10</sup>（アルフレッド・マーム・エ・フィス社第 5 版）である。第 1 版と比べ 1 巻のみであるほか、構成にも相違点がみられる。「序文 *Introduction*」は一新されたが、52 ページほど大幅に縮小されている。続いて校訂テキストが示されるが、1 詩節ごとに翻訳が付せられ、語義に関する注釈も各ページ下部に配置されるなど、利便性が大いに向上している。また「解題 *Éclaircissements*」と題された 4 つ

---

<sup>4</sup> Cf. F. Delaborde et L. Le Grand, « Léon Gautier (1832-1897) » suivi d'une bibliographie, *Bibliothèque de l'École des chartes*, vol. 60, 1899, pp. 228-266.

<sup>5</sup> *Ibid.*, « Bibliographie », pp. 247-266.

<sup>6</sup> *Ibid.*

<sup>7</sup> L. Gautier (éd.), *La Chanson de Roland, texte critique accompagné d'une traduction nouvelle et précédé d'une introduction historique*, Tours, Alfred Mame et fils, 2 vol., 1872.

<sup>8</sup> G. Paris, « *La Chanson de Roland, texte critique, accompagné d'une traduction nouvelle et précédé d'une introduction historique*, par Léon Gautier, professeur à l'École des Chartes, 1872 ; *La Chanson de Roland*, par Léon Gautier. Seconde partie, contenant les notes et variantes, le glossaire et la table, 1872 ; *La Chanson de Roland, texte critique, avec les corrections et additions*, par Léon Gautier, 1872 », *Romania*, tome 1, n°1, 1872, pp. 113-114.

<sup>9</sup> G. Paris, « *La Chanson de Roland, texte critique*, par Léon Gautier ; *Rencesval. Édition critique du texte d'Oxford de La Chanson de Roland*, par Édouard Boehmer », 1872, *Romania*, tome 2, n°5, 1873, pp. 97-111.

<sup>10</sup> L. Gautier, *La Chanson de Roland. Texte critique, traduction et commentaire. Grammaire et glossaire*, 5<sup>ème</sup> édition classique, Tours, Alfred Mame et fils, 1875.

の章<sup>11</sup>が追加された。続いて「音韻・文法・韻律試論 *Une phonétique, une grammaire, une rythmique*」が示され、末尾には「用語集 *Glossaire*」が置かれる。

以上2種の異なる校訂版の構成を見たが、両者において次のような特徴を指摘できるだろう。校訂テキストの学術的利用のみならず、教育的利用も企図されているのである。科学的な文献学の方法論に則りながらも、教育的役割も同時に担うような『ロランの歌』校訂は、アマルヴィが強調するように、ゴーティエの第1版以前にはほとんど見られなかった<sup>12</sup>。現代フランス語訳、11点もの挿絵、読解の助けとなる「解題 *Éclaircissements*」などは、本校訂の教育的側面を反映したものであると言える。ゴーティエ自身はこの点に関して、以下のように述べている。

Dans ce livre, qui est le résultat d'un si long labeur, nous espérons bien n'avoir pas cessé un instant d'aimer la science pour elle-même ; mais nous devons dire bien haut que nous avons aussi prétendu au rôle de vulgarisateur.<sup>13</sup>

ゴーティエの目した教育的意図は、同時に「普及の役割 *rôle de vulgarisateur*」も担っているのである。この語に関しては、ドミアティの次の指摘が参考になるであろう。

Le discours du vulgarisateur se veut un moyen de faciliter l'acquisition des connaissances et, par-là, de faire un effort au niveau de la limpidité du texte en délaissant l'exhaustivité de la discipline. [...] L'auteur se doit donc d'opérer une sélection, pour ensuite faire passer l'approche théorique au nettoyage linguistique afin qu'elle soit prête à être consommée par les étudiants.<sup>14</sup>

ドミアティは入門書による文学理論の普及というコンテキストのもと、「普及者 *vulgarisateur*」の果たす役割について論じているが、上の指摘はゴーティエの『ロランの歌』校訂においても有効であるように思われる。現代フランス語訳、「用語集 *Glossaire*」そして「解題 *Éclaircissements*」といった要素は、この叙事詩に関する知識の習得を容易にしているのである。またこのような教育的配慮が、主として学生による利用を推測させるという点にも注意したい。

---

<sup>11</sup> 「シャルルマーニュの伝説 *Légende de Charlemagne*」, 「ロランの詩的靈感の歴史 *Histoire poétique de Roland*」, 「戦場での服飾 *Le Costume de guerre*」, 「地理 *La Géographie*」の4つから構成される。

<sup>12</sup> C. Amalvi, *De l'art et la manière d'accommoder les héros de l'histoire de France : essai de mythologie nationale*, Albin Michel, 1988, p. 96.

<sup>13</sup> L. Gautier, *La Chanson de Roland*, op. cit., 1872, vol. 2, p. V.

<sup>14</sup> N. Demiaiti, « La vulgarisation des instruments de la critique littéraire. Un exemple d'un savoir universitaire. », *Mots*, n°59, 1999, p. 119.

しかし次章でみるように、ゴーティエの『ロランの歌』校訂は、学術出版の枠におさまるものではなく、当時の政治状況を踏まえた彼の主義主張も色濃く反映されている。それは普仏戦争（1870 年）での屈辱的な敗戦を踏まえた『ロランの歌』の歴史的・ナショナリズム的な解釈である。

## II. 政治的コンテキスト：敗戦が『ロランの歌』校訂にもたらしたもの

ゴーティエの『ロランの歌』校訂が、普仏戦争（1870-1871）でのフランス軍の敗戦直後に発表されたという事実に留意するべきである。

普仏戦争では、22 の諸領邦からなる北ドイツ連邦に加え、南ドイツのバーデン大公国・ヴュルテンブルク王国・バイエルン王国から構成されたプロイセン同盟軍と、フランス軍とが対峙した。本稿では紙面の都合上、多くの歴史研究がなされてきたこの戦争の詳細に立ち入ることはできないが、以下の事実を確認しておきたい。

開戦（1870 年 7 月 19 日）の翌年 5 月 10 日には停戦協定が調印され、1 年以内に終戦を迎えたにもかかわらず、普仏戦争がフランスへ与えた衝撃は非常に大きかった。プロイセン軍が戦局を有利に展開させる中、皇帝ナポレオン 3 世はスダンの戦いで捕縛、さらに 9 月 19 日にはパリも包囲される。続く 10 月 27 日のメス包囲戦においても、バゼーヌ元帥が自身の 18 万人の将兵とともに降伏するという事態となった。1871 年 1 月の休戦協定を受け、同年 5 月にはフランクフルト講和条約が調停されるが、フランスの敗戦は決定的であった。甚大な人的・物質的損害を被ったのみならず、戦時中にナポレオン 3 世の廃位を受け第二帝政も終結を迎える。さらには敗戦によりアルザス・ロレーヌ地方の割譲も余儀なくされる。領土は切り離され、国家財政は窮地に陥り、フランス人の憤りは激しさを増していく。普仏戦争は、ドイツに対する敵意を醸成し、愛国心、すなわちナショナリズムを高揚させるきっかけのひとつとなったのである。

ナショナリズムの概念に関して様々な研究がなされてきたが、ここでは 19 世紀中葉、とりわけ 60 年代から 70 年代にかけてのフランス国内でのナショナリズムについて、確認したい。コノールによると、当時ナショナリズムは、一種の盲目的愛国主義として理解されていたことがうかがえるが、基礎的概念としての「国家 nation」と「祖国 patrie」とが厳密に区別されることなく混同されて用いられるなど、その理論的内容は明確に定められていなかった<sup>15</sup>。しかし同時にコノールは、その理論形成の岐路としての 1870 年代を重要視しており、普仏戦争の敗戦の記憶、報復による栄誉回復の希求を主な礎として、フランスのナショナリズムが形成され始めたことを指摘している<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> Cf. F. Conord, « 1869-1879 : aux sources du nationalisme ? », *Les Dix décisives : 1869-1879* (dir. par P. Allorant, W. Badier et J. Garrigues), Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2022, pp. 395-406.

<sup>16</sup> Cf. *Ibid.*

また 19 世紀ヨーロッパのナショナリズムの特筆すべき点として、中世を国民的アイデンティティの起源とみなす傾向が挙げられる<sup>17</sup>。ジョルコフスキによると、ヨーロッパでの国民国家形成において文学研究は、国家固有の特性と、他国から峻別される起源の定義に貢献するテキストを、発見・承認・解釈する役割を担うようになる<sup>18</sup>。まさにこうした専門的研究が文献学における主流と目され、国民文学の始原が中世に求められるようになったのである<sup>19</sup>。

ゴーティエの『ロランの歌』校訂、とりわけその 1872 年第 1 版において、上記のようなナショナリズムの影響が顕著にみられ、それは序文冒頭部から明確にあらわれる。

La France possède, depuis plus de huit siècles, une Épopée religieuse et nationale. Le plus ancien, le plus beau chant de cette Épopée est consacré à un héros dont l'Histoire parle peu, mais qui résume dans sa personnalité puissante les idées, la mission, la générosité et l'héroïsme antiques de la France. Roland, c'est la France faite homme.<sup>20</sup>

『ロランの歌』を 8 世紀以上にもさかのぼる「国民的叙事詩 Épopée nationale」として提示することで、ゴーティエは『ロランの歌』を愛国心の最初期の発露として捉えようとしているのである。そして英雄ロランは、「寛大さ la générosité」や「勇壮さ l'héroïsme」といったフランスの伝統的美徳を体現する始原の英雄となる。末尾で高らかに宣言されているように、英雄ロランはフランスの擬人化にほかならないのである。しかし先の敗戦で、フランスは国家規模での恥辱を味わった。これは愛国心を揺り動かしたが、前引用文と同様、序文でのゴーティエの叙述にその一例を見ることができよう。

J'ai écrit ces pages durant le siège de Paris, en ces heures lugubres où l'on pouvait croire que la France était à l'agonie ; je les ai écrites, tout enveloppé de tristesse et des larmes plein les yeux. Je les achève, en proie à cette même douleur, en entendant les éclats sinistres du canon prussien.<sup>21</sup>

---

<sup>17</sup> Cf. J. Ziolkowski, « Tumbling back into France, by way of philology », *The Juggler of Notre Dame and the Medievalizing of Modernity: Volume 2: Medieval Meets Medievalism*, Open Book Publishers, 2018, pp. 5–50.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 24.

<sup>19</sup> *Ibid.*

<sup>20</sup> L. Gautier (éd.), *La Chanson de Roland, texte critique accompagné d'une traduction nouvelle et précédé d'une introduction historique*, 1872, op. cit., vol.1, p. VII.

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. CC.

『ロランの歌』校訂版にこのような記述があらわれるという事実は、非常に興味深い。パリ包囲下での執筆によってゴーティエは、危機に瀕したフランスという認識を一層明確にさせたといえる。彼は普仏戦争という悲劇の証言者であると同時に、プロイセンに対峙する反抗者でもある。『ロランの歌』校訂を通じ輝かしい過去と国民感情とを思い起こさせることによって、ゴーティエは、フランス人に慰めを与え、輝かしい未来を予期したのである。「この国民詩の美しい詩句が今日、自国の運命を嘆く人に慰めを与えてくれるように、そしてこの過去の逸話が未来への確信を取り戻させてくれるように！ *Puissent les beaux vers de ce Chant national consoler ceux qui pleurent aujourd'hui sur leur pays ; puisse ce récit du passé nous rendre la confiance en l'avenir !*」<sup>22</sup>

### III. 『ロランの歌』の「文化遺産化 patrimonialisation」

ゴーティエの相次ぐ『ロランの歌』校訂版は徐々に教育分野で利用されるようになる。第7版では、表題ページに「上級文学科<sup>23</sup>アグレガシオンと文法科アグレガシオン用 *adaptée pour l'Agrégation des classes supérieures et l'Agrégation des classes de grammaire*」<sup>24</sup>との記載が確認でき、新たに追加された「序言 *préface*」では、『ロランの歌』がアグレガシオンの出題作品として選出されたことを祝している。「『ロランの歌』が、アグレガシオンでの論述が求められる古典的テキストの一つとして選ばれた *La Chanson de Roland* vient d'être officiellement désignée comme l'un des textes classiques dont l'explication sera désormais exigée des candidats à l'Agrégation.」<sup>25</sup>。実際1878年に『ロランの歌』は文法・文学分野で取り上げられ、参考文献としてゴーティエの校訂版が採用されている<sup>26</sup>。しかし学校教育での躍進は、これのみにとどまらない。「高等中学<sup>27</sup>の生徒用に、古典的テキストとして『ロランの歌』が公式に採用

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. VIII.

<sup>23</sup> サヴァトフスキーは、「文学科 *classes de lettres*」が「上級科 *classes supérieures*」とも呼ばれていたことを指摘している。Cf. D. Savatovsky, « La Scolarisation du Moyen Âge et l'émergence d'une nouvelle culture éducative (1870-1900) », *Marges Linguistiques*, 2004, p. 1. : <https://hal.science/hal-04086344> [最終閲覧日 2024年1月6日]

この事実を踏まえ「*classes supérieures*」の訳語として、宮脇による「上級文学科」を使用した。Cf. 宮脇陽三『フランス大学入学資格試験制度史』、風間書房、1981年、p. 77.

また第三共和政期のアグレガシオンに関しては、Cf. D. Colin, *Passer l'agrégation d'histoire*, Paris, Presses de Sciences Po, coll. « Les Manuels de Sciences Po », 2007, pp. 15-39.

<sup>24</sup> L. Gautier, *La Chanson de Roland. Texte critique, traduction et commentaire. Grammaire et glossaire*, 7<sup>ème</sup> édition classique, Tours, Alfred Mame et fils, 1875. の扉絵を参照。

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. V.

<sup>26</sup> « Programme des concours d'agrégation », *Bibliothèque de l'École des Chartes*, tome 40, 1879, p. 144.

<sup>27</sup> サヴァトフスキーによると、古典文学教育は主として「第3学年 *troisième*」（フランス中等教育前期課程の最終学年に相当）から「哲学クラス *philosophie*」（リセの文科系最終学年に相当）にかけて行われていた。Cf. D. Savatovsky, *op. cit.*, p. 1.

された *La Chanson de Roland* vient d'être officiellement désignée comme l'un des textes classiques à l'usage des élèves de seconde」<sup>28</sup>とゴーティエが述べているように、『ロランの歌』が中等教育の学修プログラムにも組み込まれ、「高等中学用 À l'usage des élèves de seconde」<sup>29</sup>の副題が掲げられるのである。そして「『ロランの歌』教授のための実践的助言 Quelques conseils pratiques pour l'enseignement du *Roland*」と銘打つ章において、公共教育高等審議会 Conseil supérieur de l'Instruction publique が見せた「中等教育で扱われる古典的作品に『ロランの歌』を組み込むという大胆さ l'heureuse hardiesse de placer enfin *La Chanson de Roland* au nombre des classiques de l'enseignement secondaire」<sup>30</sup>が讃えられる。

文学作品の規範化と教育カリキュラムとの関係を論じたギテが以下のように述べている通り、教育カリキュラムへの採用を通じて、『ロランの歌』は特権的な地位に至る足がかりを得たと言える。

[...] l'inscription dans les programmes scolaires achève la patrimonialisation des œuvres et leur confère un statut à part, ce qui a d'autant plus d'effets que les œuvres patrimonialisées accompagnent l'apprentissage de la lecture et de l'écrit pour l'ensemble des élèves.<sup>31</sup>

集団的記憶の内部で凝固することで、ある文学作品が特権的な地位を獲得し、共有財産としての認知を受けること。この現象は「文化遺産化 patrimonialisation」<sup>32</sup>と呼ばれるが、『ロランの歌』の教育カリキュラムへの採用もこの視座でとらえることができる。公教育において学ぶべきテキストとして称揚されることで、『ロランの歌』はフランス文学の規範へと漸進的に取り込まれていくのである。そしてこの叙事詩は、フランスという国家のアイデンティティを象徴する文化遺産となる。それは校訂第 8 版の「序言 préface」において、ゴーティエが以下のように述べている通りである。「[...] フランスにその輝かしい過去と国民的伝統を思い起こさせるよう自

---

『ロランの歌』もこの枠組みにおいて取り扱われたことが推測される。したがって « de seconde » の訳語として、最も適当と思われる佐藤の「高等中学」を借用した。Cf. 佐藤輝夫『ローランの歌と平家物語 前編』、中央公論社、1973 年、p. 53.

<sup>28</sup> L. Gautier (éd.), *La Chanson de Roland. Texte critique, traduction et commentaire. Grammaire et glossaire*, 8<sup>ème</sup> édition classique, Tours, Alfred Mame et fils, 1875, p. V.

<sup>29</sup> *Ibid.* の扉絵を参照。

<sup>30</sup> *Ibid.*, p. VII.

<sup>31</sup> E. Guittet, « L'Enseignement littéraire à l'école. Quand la transmission du goût pour la lecture cède le pas à la valorisation du patrimoine littéraire » *Culture & Musée*, vol. 38, 2021, p. 75.

<sup>32</sup> 「文化遺産化」については、Cf. M. Scibiorska, M. Labbé et D. Martens, « Introduction. Patrimonialisations de la littérature. Institutions, médiations, instrumentalisations », *Culture & Musées*, vol. 38, 2021, pp. 11-28.

らに課した。[...] je me suis surtout proposé de rappeler à la France son glorieux passé et ses traditions nationales.]」<sup>33</sup>

この文化遺産化に関連する、同じくギテの次の指摘を取り上げたい。

[...] l'institution scolaire est à la littérature ce que le musée est implicitement à l'art, en ce qu'ils participent tous deux à la patrimonialisation des œuvres : par la construction d'un passé commun et la transmission de ce passé.<sup>34</sup>

ここでは教育機関と文学、博物館と芸術との関係がパラレルにとらえられ、そのどちらも、共通の過去の構築、そしてそのような過去の伝播によって、作品の「文化遺産化」に貢献することが強調されている。この指摘は非常に興味深い。なぜならゴーティエ自身が、博物館展示を通じた文化遺産化にも関心を示しているからである。1867年の帝国公文書博物館（現在のフランス国立公文書博物館）の開館に際し、ゴーティエは祝辞を述べ、数ある貴重な歴史的文書を前に感嘆の声をもらす。

Je dis qu'il est impossible de parcourir notre musée sans concevoir une grande idée de la France, sans la tenir en plus haute estime, sans l'aimer plus énergiquement ; [...] Ici, Messieurs, toutes les grandes figures de notre histoire passent successivement sous nos yeux. Voici les diplômes de Charlemagne, [...] ; Voilà le testament de Philippe-Auguste et celui de saint [sic] Louis. Voici l'image naïve de Jeanne d'Arc [...] ; voilà le concordat entre Léon X et François 1<sup>er</sup>, et l'acte original de la Ligue. [...]」<sup>35</sup>

数々の貴重文書が、年代順に列挙されていることに留意したい。ここにみられる一種の歴史認識は、1870年代以降に発展を見せる歴史観のプロトタイプとしてとらえることができるだろう。すなわち、第3共和政期に確立される「国民神話 *mythe national*」<sup>36</sup>である。「国民神話」の第一人者であるシトロンは、この概念に則った歴史著述の特徴に関して、以下のように述べている。

[...] la légende, la mythologie nationale consacrée par l'école, une succession chronologique organisée autour des grands événements et des grands personnages

---

<sup>33</sup> L. Gautier (éd.), *La Chanson de Roland*, 8<sup>ème</sup> édition classique, 1881, *op. cit.*, p. V.

<sup>34</sup> E. Guittet, *op. cit.*, p. 76.

<sup>35</sup> L. Gautier, « Le Musée des Archives de l'Empire. Discours d'ouverture. », *Bibliothèque de l'École des chartes*, tome III, 1867, pp. 525-526.

<sup>36</sup> 「国民神話」については、Cf. S. Citron, *Le Mythe national : l'histoire de France revisitée*, Éditions de l'Atelier, 2018.

façonnent ce que nous croyons être la trame du passé. [...]」<sup>37</sup>

歴史的文書とそれに関連する歴史上の人物とが、愛国心を高揚させる文化的記憶として、一直線上の通史に定置されるのである。その歴史叙述においてゴーティエが、シャルルマーニュの名を挙げていることに留意したい。その治世を彩った英雄として、皇帝の甥たるロランの登場を予感させるからである。その存在は 1867 年当時には欠けているが、普仏戦争によるナショナリズムの勃興を受け、ゴーティエがフランスの伝統的美徳を象徴する英雄としてのロランに着目したことは、これまで述べてきたとおりである。「我々の」英雄として、ロランを「国民神話」に取り込もうとする意図が、ゴーティエの膨大な『ロランの歌』校訂の推進力となったと言える。

### おわりに

ゴーティエが着手した膨大な『ロランの歌』校訂は、校訂テキストの確立という単なる文献学的成果に、収まらないものであることが明らかになった。伝説的な英雄の武勲・精神的美徳を描き出す『ロランの歌』は、祖先崇拜的かつ愛国的、さらには英雄的な「国民神話」を叙述するための語り口を提示しているように思われる。1872 年ゴーティエはこの記念碑的な叙事詩の中に、多分に神話的ではあるが、プロイセンに敗れ危機に陥った「フランス」という民族国家の統一を具現化させる道筋を示したのである。このように、ゴーティエの『ロランの歌』校訂の試みは、国民的・ナショナリズム的感情の勃興と軌を一にしていた。ロランは、いかなる敗北によっても引き裂かれず断ち切られない、勇敢な民族の模範として呼び起こされたのである。このように、ゴーティエによって校訂・注釈された『ロランの歌』は、英雄ロランと一体になるように誘い、19 世紀後半には、アグレガシオンや中等教育カリキュラムに徐々に組み込まれるなど、政治的命運とイデオロギー的反響を生み出した。愛国的政策に供され、聖典視された「我々の」『ロランの歌』は、フランス文学の古典的作品の一つに数えられるようになるとともに、読解・学習され、ついには一般への普及を果たすのである。

---

<sup>37</sup> *Ibid.*, p. 8.

## *La Chanson de « notre » Roland ?*

Politique éditoriale de *La Chanson de Roland* par Léon Gautier, philologie et nationalisme

ASHIO Yuzuki

Plus ou moins tombée dans l'oubli et négligée depuis la Renaissance, *La Chanson de Roland* fait l'objet d'un renouveau des analyses critiques et érudites dès le début du XIX<sup>e</sup> siècle de la part d'un certain nombre de médiévistes, de savants et plus généralement de lettrés. Cet article s'intéresse plus particulièrement au travail éditorial monumental de *La Chanson de Roland* par Léon Gautier (1832-1897), professeur à l'École nationale des chartes puis directeur du département d'histoire des Archives nationales de France. De 1872 à 1897, 63 rééditions de *La Chanson de Roland* voient le jour sous sa responsabilité.

Impossible ici de s'intéresser en détail à chacune de ces éditions ; en revanche, si le projet éditorial initial de 1872 et l'ambition des éditions qui se succèdent jusqu'en 1880 nous interpellent, c'est que l'intense travail éditorial mené par Léon Gautier déborde le seul souci philologique de l'établissement du texte. En ce sens, 1872 n'est effectivement pas une date anecdotique : au lendemain de la lourde défaite française contre la Prusse, l'édition et l'exaltation nationale des exploits ancestraux de Roland permettent de revendiquer opportunément une unité nationale et culturelle, précisément à un moment où l'honneur national est mis à mal et les sentiments patriotiques exacerbés. Roland est ici convoqué comme le modèle héroïque et valeureux d'un peuple qu'aucune défaite ne peut venir diviser ni briser. Ainsi, le texte médiéval établi et commenté par Gautier, invitant à « faire corps » avec Roland, trouve-t-il un destin politique et un écho idéologique tout à fait remarquable dans cette seconde moitié du XIX<sup>e</sup> siècle, au point d'être progressivement incorporé aux programmes officiels de l'Agrégation comme du Secondaire. Mise au service du « mythe national », *La Chanson de Roland* intègre en quelques années seulement, le corpus des classiques français édités, lus, transmis, appris et enfin vulgarisés.